

留学生と創る！ 「京文化(能・酒造等)マイクロツーリズム読本」

1 目的・概要

〈目的〉

能や日本酒など地域に根付いた文化を継承していく人々の生の声を聴く中で、地元の私たちが知らない魅力が多くあることに気がついた。コロナウイルスの影響でマイクロツーリズムが普及し、地元の人が地域内観光をするようになった今の状況は、そういった地元文化の新たな魅力を再発見できる絶好の機会である。

コロナ禍になる以前、地域経済の活性の手段としての観光は、主に県外や国外の人々をターゲットとしていた。しかしそれは、オーバーツーリズムのような弊害が起きていたことからわかるように、あくまで外部的な力による活性化であった。遠方からの観光客を前提とした以前までの経済活性は、これからのニューノーマル時代にはそぐわず、むしろ今優先すべきなのは、地元の人々が、これまでの観光形態では可視化され得なかった文化の内面と向き合い、その魅力に気づくことであると私たちは考えた。

そこで我々はマイクロツーリズムによる地域の魅力の再発見と地元民との調和を目指した日本語副教材を留学生と共に制作する。その日本語副教材を通して、根底に揺るがない精神(もの)をもちながらも、時代に合わせて変化をしている京文化(能・日本酒)を学生目線で留学生に伝える。そして、そのありのままの京文化を大事にし、心の底から応援する人々を増やすことによって、オーバーツーリズムの抑制を図りたいと考えている。



〈概要〉

上記の目的を達成するため、本プロジェクトでは「ひらく みつかる すきになる NOHとSAKE in KYOTO」と題した、能と日本酒に関する日本語副教材を制作した。このプロジェクトの目的の一つである「地域の魅力の再発見」を主眼とした本教材は、能・日本酒に関わる人々の京文化への想いや、京都の社会課題など、京文化を深く知ってもらうことのできるようなテーマを多く取り上げた。また、日本語副教材としての実用性を担保するためのワークブックも同時に作成した。以下に制作の流れを記す。

春学期には、プロジェクトメンバーでこのプロジェクトの意義について話し合い、自分たちが本プ

プロジェクトに取り組む目的を決定した。また、その決定の過程で、能・日本酒の関係者や京都の観光に関わる方々をゲストスピーカーとして招き知識のインプットにも注力した。

夏休み期間には、春学期に決定した自分たちの目的に沿った読本構成の決定を最初に行った。その後、その構成に基づき、能・日本酒に携わる方々への取材を行った。

秋学期に入り、9月～11月には、読本・ワークブックの制作と留学生への模擬授業を中心に活動した。留学生への模擬授業は、制作途中の読本を用いて授業を行うことにより、課題の発見とその修正を行うためのものであった。実際、ワークブックの制作は、模擬授業後にその必要性に気づき、制作に至った。

制作後の12月～1月には、実際にそれらを用いて留学生に向けた授業を実施することで読本並びにワークブックの実用性を確認した。



Annual Schedule

2021年	4月	チームビルディング、ゲストスピーカー講義
	5・6月	プロジェクトの目的決定
	7月	読本の構成決定、各取材先の選定
	8・9月	取材
	10・11月	読本・ワークブックの制作、留学生向け模擬授業の実施
	12月	読本・ワークブックの制作、留学生向け特別授業の準備
2022年	1月	留学生向け特別授業の実施



2 成果達成度

本プロジェクトの目的は「マイクロツーリズムを促進させ、京都ファンを増加させること」であった。この目的から、「授業後に留学生が現地（能楽堂や酒蔵）に足を運ぶこと」を主な目標とした。1月に行った授業後には、実際に能や能面を自発的に見に行っていた留学生などもいたことから、交流することのできた留学生に対しては当初の目標



を達成できたように思われる。ただ、コロナウイルスの影響もあり、交流することのできた留学生は全体で50名程度であり、定量面での目標達成に関しては、少し課題が残った。

また、活動をしていく中で思わぬ成果もいくつかあった。一番大きなものとしては「このプロジェクトの効果が来年以降も長期的に続く」ことである。留学生との更なる交流を図った結果、京都日本語学校に私たちの読本を置いていただけることになり、その他聖母学院にも読本を置いていただけることが決定した。こうした外部への広がり当初は予定していなかったが、私たちが関わることでできなかった方々に対しても一定の働きかけができるようなプロジェクトになったように思う。

3 プロジェクトを通じて

本プロジェクトを通して、留学生に対して働きかけることができたのはもちろん、自分たちの成長にも大きくつながったように思う。各メンバーがローテーション制で、毎回の授業を設計したことや、1年間の多岐にわたる活動の中で、各メンバーが何らかのリーダー的役割を担ったことなど、チーム全体を高い視座から見渡す習慣がついた。



また、本を作る過程で多くのディスカッションを繰り返し、「人にモノをつたえること」について改めて考える機会にもなった。



編集後記

この1年は大学生活の中でも濃く、学びの多い時間でした。コロナ禍で人との繋がりが制限される中、「学生である私たちに出来ることは何か」を日々真剣にチームで考え抜く経験が出来たことは恵まれた環境だったと実感しています。「留学生」や「ツーリズム」というキーワードは、コロナ禍において特に社会的意義のあるトピックでした。一方で、活動を制限せざるを得ない状況にも見舞われ、葛藤も多くありました。中でも、微力ながら活動を完遂することが出来たのは、担当の先生方、科目関係者の方々、そして協力して下さった取材先の方々のお力添えがあったからだと思っています。メンバー13名一同、深く御礼申し上げます。1年間ありがとうございました。

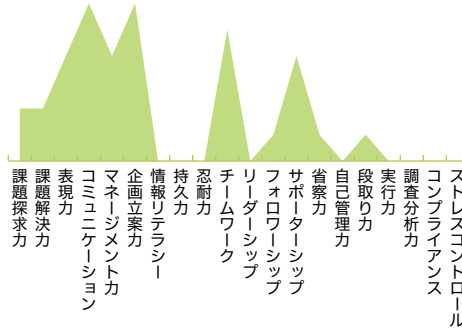
プロジェクトメンバー

村上 水音(文3) 岸本 大治(文3) 北條 瞳子(社会2) 多田 順哉(法4) 小林 岳人(法3) 奥田 味鈴(法2)
佐藤 颯人(経済3) 藤岡 実紀(商3) 上田 竜晟(政策3) 花房 空也(政策2) 鶴川 結依(政策2)
浅井 悠那(文化情報3) 河野 茉美(グローバル地域文化4)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

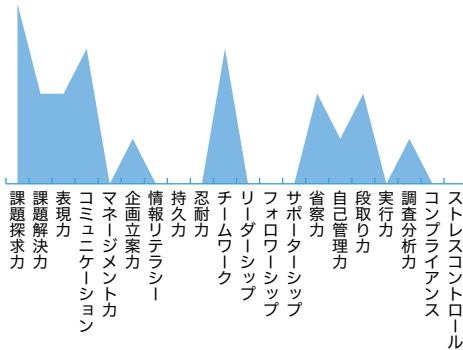
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

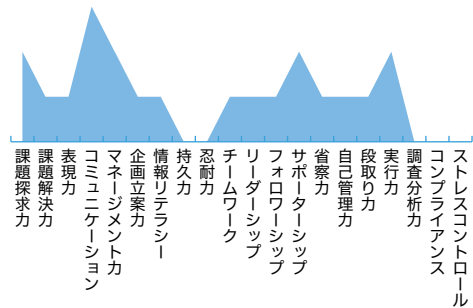


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

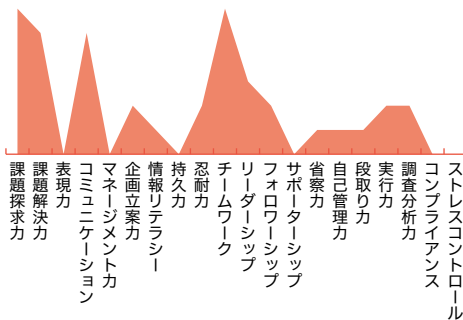


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい

